義楊日記

櫻癡居士評

僅々三十字能ク時勢ヲ言盡ス

葉櫻日記序

國必自伐而後人伐之如德川幕府征長之舉是也葉已自伐誰復能救之　王室中興之機實決於此乎然而天下諸侯既柴皆畏幕府如虎倫安姑息

九曜文庫

當時ノ志士ハ概皆志大ニシテ才疎ナリシガ故ニ其謀モ亦疎ナリ而シテ其謀ノ慎密ナルモノ遂ニ大業ヲ成ス是レ山縣君ヲ喚起メ所ニシテ文章モ亦慎密ナリ

至亂為補拙是乎志士慷慨
悲憤殺身不顧余未嘗不嘉
其志而哀其謀之疎也山縣
君風存心　王室慨然以回復
皇威為己任壯歳周遊廣
交名士遠謀審遂引而不發

丙寅ニ役克隣敵曰今而不斷
株將没失焉乃変名姓潛ノ
赴京投薩邸與諸豪結賓
為丁卯歳五月也時幕吏誅
察為ニ密出門寸步陸敵等君
居其間能避敵之耳目以定

田中青山君ハ即チ文ヲ知ルノ人ナリ文ヲ第一ニ置テ詩歌ヲ第二ニスルコト斯ゾアルヘキナリ

涂根固蔕之策而此書出
其時所記多一不出於忠君敵
愾之餘命曰葉櫻日記如記
中散見詩歌亦皆沈鬱痛
快而自有優游不迫之氣象
自飛胸中規畫確然不動爲

薩長二藩ノ勢力ハ實ニ此功ニ由ル其今日ニ至ルマテ積威アル敢テ故ナキニ非ザルナリ

強如是哉遂使薩長二藩同
心戮力一戮此制幕府死命正
奏回天之功可謂難矣古人
云天將降大任於是人也必
先苦其心志余於君乎觀
之須臾在目白第一夕注訪

青山君敢テ文章家ト云フ程ニ非ス而シテ此序ヲ讀ムニ頗ル尋常作家ノ筆ニ異ナル所アリ是レ余ガ平素言フ所ノ文章トハ文字ヲ假リテ其志ヲ述フルナリノ說ヲ證明スルニ足レリ

寫談偶及古畫余亦當時從
君後者對卷不堪今著之
盛意題其首明治廿五年
三月青山田中光顯撰并書

心ニ深ク期スル所アリテ出國セラレ爾モ國難戰爭ノ際ナリ然ルヲ更ニ夫等ノコトヲ言出サズシテ左モ事ナゲニ雪月花ノ韻事ニ託シタルヲ以テ君ノ心事ヲ想フニ餘リアリトス是ヲ他ノ紈袴子弟白面書生等ガ事實何事モ無キニ夸大ノ言ヲ放チ以テ自ラ喜ヒ所謂無病ニシテ呻ル者ニ比

葉櫻日記

ゆきをいとはしがるものとのみ思ひしかどもかくまでにこそあるものなりけれとおもふにいとあはれなり。

ことしの春のはじめ、ゆきのいとしげくふりつもりたるに、ひまなくふりまさるをいとはしがりて、ことしはいかにかくのみふるらむ。都のそらの雪見ふるまに飛鳥井の家にまうでたりしに、何のあやめもわかぬ人のいとゝ色白くやさしくて、こゝろはむねをしくやさしくて、ものいとあはれなるを。妻のおもひけるをもとゝ詠めるを。梅やさくらのうちにうすむらさきのをりをりまじりたるをいとゝこゝろふかくおもうこのれいたちの歌さらに紀のなりはよりさきとしをとりしたちしをを人となりてよくまことにけふとゝ

スレハ素ヨリ同日ニ論スヘキ文ニ非ス志士胸中ノ閑日月ハマサニ斯ノ如クナルヘシ

此序ハ實ニ完璧ノ文章ナリ文章ノ詞格高尚優美ニシテ複読再三再四益々其妙味ヲ覺ユ山縣伯ニシテ此如文名文アリ余ガ如キ文ニ衣食スルモノハ愧死スヘキ程ナリ

いひきかせふとすきて。何ぞう川のふちもあき。淋しう。ちりのちりきて。五月ちのうなりて。たまらくてを。花もちりたてる。さくらもみもなき。旅なる。秋とかつりてを。興ある。まさ。ちらぬ。とて。ちきれ。おきる。薩摩の。国人伊集院金治郎中村宗次郎なと。体なひて。五月の二日北日。赤間の関をや。をものの。瀬戸乃。果せよきほひて。舟を。ひきす。ぢ乃。ほとの。さくいも。揺ぬ。かい

春ハ。あけぬ。何やしらう。ふまあく。ものうなむ。数ふる。をれも。みもちきさられたなら。か。宋つりて。義桜は。記と。名つけ。ものを。数堂。あなを。をこのまし。ぬ。きなり。や。

嘉永三させの長月

山縣素狂志るす

評者
國文　片山貫一
漢文　長三洲

藝妓一る山人の歌れ
ゆけよ休めるゝ如し

慶應三年五月二日なれはしれり
時はなるこゝろ。志ほあひかゝ
て。船子ども。をいはかゝけ出
いをきをいはゝ。こゝろ。おくる人
を久保松太郎　福田俠平　滋野
謙太郎　伊藤傳之助　河北義次
郎　山本重助なを船屋まゝよ
める

わくる人。ゆく人ともあて。ゆも
つなを。とゝまつ。むすぶ船つ。船
出しよけ屋

鎌倉の右大臣の流なり

三首ノ中ニテ余ハ尼モ末ノ歌ヲ愛讀ス

別まてもゆあふしほのもやとのの御戸を明よあけこそいてしをふるれ

何事も身をうらこそ侍ら迄すつき人のたとの業をもあらはせ物まし

三日雨ふる夜なりも過るこ物新泊とりふさころまいりをなりすきたこちよ唄とそらもて新泊なりおひてこ物ふまはてよりを社

四日ふりこ姫らすこ日をくらす

大佛の是主ハそのさまいやし

是レ実境ナリ余モ此状ニ遇タルコトアリ敢テ賤トスヘカラス

みやこかくりのおもしろ
四月ふるもむいそ山み
るるふしちは

明たなるこころあらしふつまてこ
こをいい

追手なき風を字らみてふな
子らのかちつのうきるかは
のをかしき

夕月のほれめくころ下松よいた
る郭公乃なくをきこて
ほとゝきすにみやこのうりは
ひまなめて山ほとゝきの業
もらしけ書

五日ふををれ日こ迄りあつき
山あらしよまかせこ船をいとす

おのれもこのさうりまて
奇あり年年出一神
代のうまれうのふるい
いよの二並ちしまの山
けふもちきかるりけ
家人の文をもやおと
祝島いをひまつらむ旅
かくこれをとうたひつる
ちとり遠うらぬハ世ひ
いてられるるやいとを
うゝ

此歌奇ハ則チ奇ナリ但
余ハ此般ノ趣向ヲ喜ハス

いとのしゐあ彼のいてやまを
りくゝり進毛のう勢れ物も
しちきうれ
あるさとよちまき何や先ら
やりまもて わうゐくた乳を
以えふなるもむ
ひるすくふさろより進風いよ
をけし
なみふほえ風をいりて字
なるらもゐきををけゆくふ
こちうそすま
暮うゝ風かりを西ヲなるいを

敘事簡潔是ノ如クニテ
文章求メスシテ高尚ナ
リ

ひゝきのなるれるゝ
らうぬけしき分り
きくこておそろしうな
む

此歌淡白一讀スレハ嚼蠟
ノ心地スルナリ然レ氏作者
當時世ヲ憚リテ舟路ヲ
取リ陸路ヲ羨ム情ニ発
スル所ヲ玩味スレハ一讀シ
テ慨然

山あらしよはまて十里何より田
き秋何くる
六日松をしくよりけふもまさ西
ふく風ゝ吹つよ
れるふねもくたくはりまうち
をする波のひゝまれなたを
はをしき
夕つゝ風もいさゝりおさまりて
月いをあがりけまを
くるゐ山くは月ふふ見をひろ彩
つゝまをふあうしにうら春
きひを春

名にしおふ雲ゐの月をうつしてきゆくほとけの御路とも
なるべしむつし

此時京都ノ模様又ハ江戸ノ様子トモ聞テ多少ノ感慨アリシコト推測ラレテ悼然タリ

うつりかはる世のありさま

すゑあふぐ御ちかひの月のうち
帆あげてゆくたびぢを船
路とぞなる

秋あけて兵庫のみなとに入る品山
なるのーといふら家よやとる
七日けふもよし船すゑるころ浪
華よいうる川口よかゝる薩摩
の蒸氣船下かゝしてみやこのお
とかからあひてさうるいるす
くおとき江戸堀ある薩摩の藩
邸よつきぬ

そよぎ。ゆーとさはきし。

さまこうるこゝちしてう
なしうなむ

無限感慨

當時君壯年ニヘ此用心深キ中ニテ寫真ヲ取ルナド、云フ不注意ノ事モアリシカ今日ニ成テ顧ミモハヾゾット仕ヲフナラン

是レ責テハ生テ居ル中ニ我姿ナリ此寫レテ形見ニ殘シ置タレト云フ心ニテ寫シサテ其寫真ヲ見テ自テ前途遼遠ナルヲ覺エルノ作ナリ

下句何いとめてかし

難波江のむーか雪りれたひ
をかなーき

八日ふる里わすれりかのうちなる
二人ともり心齋橋すちの寫真と
いひて人のうつす家うい生る
これをちりきこちより世よひろく
行きれをれを。坂の紅もこいちみの
てら坂か姿をうつさせて
志のたまと。なるまゝ。れちゑ。
いうなちむ。うつすきのさも。は
ちこのーの方や
九日ふる。ふなーけふ淀の川船

斯ノ如ク露出スルハ君ニハ稀ナルヿナリ余ハ此般ノ詩歌ヲ厭読スル蓋當時大ニ憤激スル所アリ其英鋒ヲ包ムヿ能ハサリシナラン非邪

衣通姫は流なり女のうたなるゝぬとやさゝくきこえていとめてたし

けふたのかうさま参ひやられて血のなゝたゝらふなむ

肝ニ鏃ノ立ツ心地セラレタルコトハ御尤ナリ歌ノ巧拙ハ論スルニ及ハス

ふれるときこそ年の時なりけり
よとうはめ水れこゝろをかはらぬを世をさのをまりなと形ゝるらむ

天王山のふもとをすゝるほとゝぶし年ともちうちちにきしこゝなと地もひいてい

そのこのみをいうをかりゝ多む今もなほきゝふ矢志りのたゝ川
ふいちしを
淀のゝちりをすゝるときほゝきにのなくをきゝて

酒落ノ詞君ノ平素ニ似タリ

酒ヲ飲ム。出立ツ。雨フリ出ス。雨烈シクナル。途中困ル。辛クシテ大佛前マテ歩ミ来ル。出迎ノ人来テ待ツ其状見ルカ如シ此等ガ記事ノ妙處ナリ妙處ハ求メスシテ成ルモノナリ

一杯を水をなをりていまゝ
またゝゝのわゝりをゆくほ
ときゝす

よなるわるるほと伏見まいるこゝ
れ文珠四郎とふゝ家よやとる
十日雨ふる大山格之介山内半左衛
門なと三ゝり四ゝり来てさけのむ
いてゝらむゝりけるほゝり雨ふりいつ
からふりて大佛のあゝりやどりすむ
すこのゝりふ黒田了介川村与十
郎永山弥一郎田中顕助橋本八郎
なと出てむゝふ橋本八郎ハ品川

此歌ハ君ノ詠ニシテ可ナリ尋常ノ者ガ読タラハ氣違ナリ

漢文ノ序ハ時ニ取テ妙ナリ且ツ本文ノ歌ト此序ト相應シテ殊ニ面白シ是レ故意ニ出タルニ非ス偶然ノ事ナルヘシ夫ガ却テ妙ナリ國文ニ書改ムルハ惜ムヘシ

此注釈ノ通ナリ十分ニ言得タリ何ソ不分明ナルアルヘキ

人丸の近江の故都をよきられむなりあもけよく
ゑとゑれをのうきこと
えてなむ　悲愴

ここのこからさきのやまでそ
つりをくそつられるハひあ
りてのちとまやなはあの
うらちもそなるらあら
ゆをこをはまかまは
しうなむ今あのうたそ
ゑをもて試ゐるかきな
しゐらむまをけふちさ

つまの人ことはのとふ
まやあをふ木との葉葉
うはもしうをめなーを変
う郭公のなきうをに忘
くこのなーうもをの走う
も吟えて市をれなるり
こふあをいつ、むすーの
ちとあと惜しいてしなと
かき寄ーおめてこまほし
うなむ惜ゆるうし

皇國の本末ハそれにもなをひらくともいのまかえ
をむ物のれらめまものし
とくうなーうつきよあら
すとなけきうるひるやき
うういとえぬこちーて秋
の月きうるちーあつき
れ雲よあつるのかとし

弥二郎の変名なり雨ふる夜
をけ―なりそひるまはころ相
國寺なる薩摩の藩邸といふけ
ふ伏見なりの在まそよあふ
のくはうりあれ―みやこう
山川のすそをかりをうそ薩
きりけま
十一日けふをれをうを里薩摩の
人とひう―山の曙樓ニ何ぞふ
満山新緑杜鵑頻叫痛飲浩歎
茲憶舊遊感慨之餘詠國歌一
首

十
十
十

ちはひ遠れむう―かをうをむ
―てなくこの乗ふ―れや来
ほを歌に
十二日くもは
十三日雨ふ
ゆをををはさひらくをす
をう来れ思のをすをいこ
うかををむ
十四日杉なーくくをる
ヌうつをてなふをは人をとこの
むへきせりをふまの世りを
何りを里

是程ノ精神デ無クシテ王事ニ身ヲ顧ミサルヿハ成ラヌモノナリ精神發シテ歌詠トナレリ

目もうつらぬ鬼神をあはれと思ひ知せとをこれらのうさをやそふなるへき

却れもむすの一枝をひいてられて忘しき花のおもかげまなむ

十五日あ免大内山りかひおの琴たまくる鶴のありけ思ふれう蓬れ物よみれてきこえけまを

うつくしふるなこちなき音琴をきらう雲井はるの琴をゆうの一き

十六日てけあしふきさら中のんくと東山ふあ枝ふ

ひう一山さう紫うれう中咲ゐてむう一を出ふ花れ物かけ

十七日ありこふうすみ日をくらすけふふ夕つうさ伊集院うしの咲ころるあるしす酒ゐみうそて秋ふううかある

かやりたくけふりうすれて東山はきも物ろれ雲の物うけ

十八日雨ふる言たるぬの枕り國うれことちと夢すうふきあてこうちくるしく物ひて

夢れ世と物ひしすてふ一ゆ免きあて枝きところ物き言の物ひしう物

うすれて上を逢て月も物ちとるたくうり梨一ちく

此歌愛吟數回

實況中ノ實況真實中ノ真實評者ハ何ト此一章ヲ論シタルヤ是ガ即チ葉櫻日記ノ要處ナルヘキニ

何ヲ語リ合タル乎余之ヲ知ルヽ

此詩モ此時勢ニテ此作家ニテ然モ今日アルヲ得テ諸人ノ敬讀シテ賞賛スル所トナレリ

機去機来四字非身在京師眼透表裏者決不能知又決不能道
拓胸襟獨在喫茶時可見當時無人可與語者作者憤悶之狀言外得

ひろまる江西郷吉之助のところ
ふいてる何くれとかいうあひて日
くるところやとうより屋敷
十九日ものれもるまり
丁卯初夏薩越土宇四侯朝闕下
義聲鳴天下時余趨京師潛身薩
邸觀天下形勢有所感次土藩
田中顯助韻
幾年潛匿自多嗟又向天涯送
歲華機去機来帝京下獨拓胸
襟閑喫茶
原作　田中顯助

若シ直言ヲ許サレナバ余ハ此詩ハ感吟セス青山君ノ原作ヲ愛吟スヘシ

是レ真情ニ發スルノ詩ナリ語氣ヤ字句ニ拘泥シテ論スヘキニ非ス

之

承句露鋒ニ過クヽ之ヲ再考アラハ實ニ名作完璧タラン

緑樹与白骨映射感愴之情殊深

逸ニ前詩ニ勝ル萬々

與義新三字未精結末語太朴直蓋意切情

又談時事共長嗟何日膺懲拜翠華杜鵑梅雨悲酸淚和在今宵一碗茶

二十日雨ふる

青草沙邊白骨空回思往事恨何窮變遷世態有今日重入東山緑樹中

廿一日夫婦ともうけあいきたまひらぬなるの由社ふまうつ

謁北野神社悲泣伏訴君寃
凛烈威靈千歲伸忠魂一片與
花新君寃未霽臣心切拜向

急不遑擇音也

人間ハ年百年中張臂バカリハ出来ヌモノ此間ニ斯ル風韻アリテコソ

末句一讀使人灑然

當時志士ハ是ノ如クニ幕府ヲ見タルナリ此題序一字ヲ改竄スヘカラス

而字平聲可惜

京城人海謂更無人自樂
天同心一人去坐覺長

當時余ハ江戸ニ在リテ幕府ノ為ニ此通リノ料見レテ感慨セタリ而シテ一ハ敗レ一ハ成ル噫

安知之意

不曰更無人而曰更有人語不徑直意殊深惋

肖王新城
宛然一幅東山活畫新
城有愛好之癖無此
妙味

高調

雲遮宮殿四字殊覺沈
痛杜宇一聲与十五日和
歌鶴聲異曲同工

神明哀訴頻

帰名さ二條城見うりを経て堀川より出て夕つくやとりまかつる

垂柳毬々含緑烟三條橋畔對清蓮不知新月東山出白石明沙光滿川

廿二日 ほなくまれらまる

幕府狹幼天子以譎智奸謀愚弄公卿輕侮諸侯滿朝只仰其鼻息而止矣感憤之餘賦一絶斯而行之避鬼神滿朝何事総逡巡區々海内堪嗤笑借問京城更有人

廿三日

廿四日々ふる雨ふる

雨中望東山滿目新緑風色極奇

滿眸新緑曉雲輕細雨無端又欲晴最是東山好風景幾層高墻霧中生

雨夜獨坐有感

雨拍空窗伴旅愁雲遮宮殿上林幽此時獨坐天涯客杜宇一聲和夢流

日本人ハ支那ノ歌ヲ模吟スルヨリモ日本ノ詩ノ方優カニ情況ヲ言出シ得テ佳シ此歌ノ如キ日本詩人ノ言得ル所ニアラス

おのれもあさみのしらてはゆるとのさゝらの世れありまさまなむ

辛抱ニ辛抱シテ筆ヲ執リ玉ヒシガ辛抱ガ出来ズニ此ノ如クニ英鋒ヲ露シ玉ヘリ而シテ文ハ是ニテ活氣ヲ生シタリ

落魄ニテ差支ナシ

落魄二字与實不合改作潦倒何如

末句語意未完

訴舊時三字似弔古語与全首不屬

廿五日春のはゝ晴たり

廿六日ひるもくもりてよる雨ふる

ふるしみてむすめぬ夢ハ東ちらをもちらたゝ特は幸川

五月雨のそら

天の下ハ事とも思しまゝまゝ

陶つりこつ奸賊ともおほのり名里

きてなむうくもりめり名留

廿七日名ふもくもれ星

臨別贈伊集院金治郎

落魄任為雲水身風波滿地世酸辛今宵不作別離語期在彈

九雨注晨

廿八日ちれ日くれ星名ふも東山よ

り白河橋のあとりよ何ぢふ

やすらゝと木のゑくむ子れふ

とのあ桑をみやぢをことりなる

つゝきか事

白水橋頭繫我思西望帝闕與心差不知英傑幾多恨空有灘聲訴舊時

廿九日雨ふる

六月一日雨ぢふ

うに國ふかゝ星ゆゝむとすそのこ

薩摩屋敷ト云ハバナゼナダラカニ非サルヤ詞ハ是非ナレト明ラメ玉フシ

此通リ和歌デハ渾然タル氣象ニテオハシナガラナドテ漢歌ニナルト露出シ玉フニヤ

詞書モ歌モ共ニ妙

きつまやしまとはいふ
なほるらかよあらまほ
しきこゝちす

とも薩摩人よりかりてのち
いつたるなこゝろをきめぬ我
身すちみやたをうきを立う
かりけり

二日をれとらをり故ありて
たとふれ時つけ行こうつ
れをたゝちほの乃心
里々梨

三日はをわられ里
はやひとのきつまやしきれ
らほとをかりまやこ留
身とハ知ぬる

此奇ををうしうひと
られてきすをきむとや
いふをうらむ

名吟〻〻

ここにうのこと葉
いうふハ待らぬ

問ハズ語リノ言ノ葉ニテ慶應明治ノ時代ノ人ニハ能ク解ルナリ

薩人のよき便りもあれをうたをし
なをいひてらめをまいくなを
四日なるはをれとを
くさまくらむすふる春らき
物をひねれゆをのすをとふ
ほをてきたをれ
五日をりをとられを
きらはををわれ世を業れ
ことの業を世をたをりと
なりまるるれ
かをふれをゆをより夢れ
ふをちしてよをせのなつ世

墮淚ノ文ナリ

明大義三字是詩史本領
作者他日回天之功亦必不
負此語

はや苔むす寺
五月雨のけふるう
ー子のどー水無月のけふるう
友なりける杉山律義吉田年九な
と知ひもありて國のためみと物も
ひ起ーいたとありけるのそのたと
なるすを方まのりとるそれの墓
ありていかくそよめるなむ

六日晴

讀田天詩史

事業傾顛未半成猶明大義誓
神明墨川空作孤囚客一片精
忠與水清

英雄自ラ閑日月アリ

第二甚奇

さふのあそひ見るもいとも
してあるれはめてをき
ものなるなむ

佳吟絶調

七日はれはすみ日をくらす
食後與薩士至相國寺見螢火帶
樹沿水笑語四起亦潛伏中之一
奇游也

微風生處水聲賒螢火飛々如
落花遥望前峯天又雨淡雲漏
月月光斜

八日きれはなし東山のほと
るを人とをもふもはしを
かなるもそすみをそらす
うもいのはられ月をうけ
中ニ海くし

こゝを拾なくしく侍ふ事
はりなきを涙しらせ
む

とく調ひてめてたく
こそ侍るものを

九日 雨ふる吾不知俳歌戯與少年輩探題隨筆成之

又吉の祝むらめをのゝし麦の粥
葉ばたく老ぬ小こゝ時雨うれ
病ひとつ夕日見えて志られけり
うつもを影形もむし空合佛
ものいふと人をうしなふ花の月

十日

いつもとも世をうれあめ社吉
たえて月うも物をなもあ事
こ物うの

十一日くもるいつれのあをひるむ

かつるさ遠し五月雨の空
とあれハほゝ咲たるを
んとせしかりの山寄る
きらはもし初よ玉こ物
アたるむといふをさら東
の人こちひてとこあれ
ハとみてつるハしけると
かゝまほしうなむ

喧中靜境知者蓋尠
水聲月痕何時無有擾
二者不能覺之勤王大義
討賊事業猶如是作者
獨能觀之有味夫此言

といふり薩人のまひて少らあけま
はらみてつのをしを
たとる春よをこをいまをたを
りけ星のへるき遠し五
月雨の空

十二日雨ふる

四面笑言如浪喧滿川燈火與
星繁三條橋上人歸去始認水
聲兼月痕

十三日なのをはまて空雲ふる
ろ打かをりるけしきを月い
とあらめを遠を

丁卯六月十五日晦日幕府ニテハ祝事アリ時ニ余ハ江戸ニ在リテ其時作リタル愚作ノ轉結ニ遠

下句同めてたくなむ

五月雨それとうてまは
うなてめをなく日うけ
のきぬ勢ひやるをたへ
かくきこちす

をーたとと上ふいつるやう
まあらまほしうなん

十四日きをたり

わき出る雲よりくもれみを
なーて風ふきたゝぬ夜ぞ
くるーき

さみられのをまゆく松らも
なるもれをはれぬやなふの
ぬひなるらむ

十五日於なーー歸期遷延西郷
来劇談時勢

きみられ　こさせる陶をあ
けぬまにをまーく月れうけ
たほれきぬ

莫襄陽事方急宰相依舊視昇平ト作タルコアリキ是レ恰モ君ガ西郷翁ト劇談時勢ノ日ニテアリケルカ

聊カ詼諧ニ似タレ共是亦心事ヲ吐露スルノ語ナリ蓋シ當時欲斷未斷コノ機會ニ於テ斷ヲ促スノ意ハ詩ニモ歌ニモ漏溢ルヽモノナリ

妙々人世ノ真境

かーときたまるゝひろ
まをきを寄のをかをいをき
ゆーをたれてきをゆ

ぬつーををゆひをたあし宮
をのらをををといをぬ日をを
をのりけを

十六日々ふもよし薩公手つのら
六連砲をたまりの名れを
むうふ仇おらはうてよとたまハ
りしはとれひいきを世ふや
ををふをむ

十七日をのはハをーけふをタつ
うををのの薩摩人村田新八黒田了
介と共り都を出ふつ四條乃橋
のほうをより高瀬の舟りれる

實ニ名吟ナリ
君ノ胸中瀟洒
可掬

大望ヲ懷キテ京ヲ出ル
ノ日ナリ斯ル場合ニハ事
成ラサレハ再来ノ日ヲ期
シ難シ此ノ歌ノ如キ平凡
ニ似タレ𪜈此心ヲ察シテ一
誦スレハ多少ノ感慨アリ

叙事嚴肅敬服

たけなくさ〻ゑうちあ
ひて勅撰の奇集あと
ゝまるゝけるり

高瀬川さをさるきしに舟人
とみやこのきふ望なつかしう
表うれ
られをくるこ波ふし見よいるる
ふいふて雨ふるいつ宵ふくるころ
よみ淀の川舟まれる空まち晴て
月いとあかし星多刺
きしくたすよとのうえ涼乃涼
しさも風まと世情を知も
はきりタ星
十八日とある日のいつる比難波の
川やしきをつきぬ

原作モ和韻モ共
ニ豪傑ノ詩ナリ
韻調ヲ以テ論ス
ヘカラス而シテ維新
ノ偉業モ此所ニ
根因シテ其明勲
赫々タルニテ此詩
実ニ萬鈞ノ價ヲ
生シタリ但シ薩
長ノ勢力モ亦
此詩ノ結果ナ
リ

きしまれをみくる家とも
のさまけよあつさもよそ
ふなのれてなむ

唯此一首可為此卷壓尾
蓋運籌已熟決勝已
定田天日護帝基六字
揭来昭晰他日之事如
指諸掌

黒伯ニシテ此名吟アリ
一詩ヨク千載ニ傳フルニ
足レリ

このふろれたつぬあつさのくる
しきもよ乃ふりなつせ保川
ちらの船
十九日なつえいよ〻
黒田了介有送余詩次其韻和
答
男子何為歎別離計謀一定莫
懲機出奇憂變田天日共揭錦
旗護　帝基
原作　黒田了介
兩心相結不相離事業由來貴
見機一語贈君々善記田天志

豐瑞花ニ乘玉ヒシトキハ
如何ナル心持ニテオハセシカ

三百ノ内ヲ西ヲかすみと面
なく四方やく蒸氣のきま
くらみとられてめそた
くなる

在建　皇基

廿日たれもこぞりて。たの朝旅乃
調度なと取ちらしめて。薩人と
ものも川船をれりて。かは口ヲ
かりたる豐瑞花おれる。たを
鐵はくをの蒸氣船ハなんあり
けり

廿一日おなしくよし　夜あくる比
烟をたてていうりをあく
こもつなをときし浪もめり
くちもまたいくうちは西ヲを
なりをり

實況

ゆけたてめるくらまのひ
ゑもきれこ枕ふまをて祈られ
をりけり

廿二日　おなしくらし　鐵造りな
れをたとさらは　ねつさのはうく
て分れおき所さくちをきくちす
採ぬるもはさきをむるを　於
もほをすゆめもあるにを
ちいをもなし
湯けのくこ船さくてれてを
らをくもゆるはのりのた
こちをすれ

歸國ノ狀僅々三四句ニテ盡シテ見ルガ如シ記事ノ文ハ必ニ斯ゾアルヘキナル徒ニ啾々數十百言スルモ更ニ妙ナシ

日くれなんとするころ三田尻の問屋口にてつきぬ。なとり隊の屯屋ふいくるるをまくれとはくるるほとに秋もさらみとそまつ

うくてをゝ度ともなひて明りし

ハ品川彌二郎島尾小弥太さそ

を土佐の國人田中顯助さそ

も我國ふきあてよのさとめるも

い生つく人なりけ里

山縣伯ノ和歌ニ長シ玉ヘルヿハ兼テヨリ善知レリ其詩モ巧ニテオハスヿハ餘リ知ラサリシガ此編ノ數詩ニテ敬服感吟ノ外ナシ然レ𪜈余ガ尤モ敬服スル所ハ詩ト歌トニ在ラスシテ記事ノ文章ニ在リ其行文簡潔ハ云フモ更ナリ實境真況ヲ二三句又ハ四五句ニテ盡サレタルハ讃嘆シテ措カサル所ナリ伯從來文ニ名アル人ニ非ス而シテ此文

前日見示葉櫻日記敬誦一過金玉錬成長片山二子批評盡矣予輩空疎佛頭着糞宜固辭顧至寶不須久留急附价封還特憶

丙寅丁卯之間

先帝英武類

延元上皇滿朝搢紳偶非無如藤房其人者吾藩東西連戰大挫賊燄薩藩抗論京畿持正不回時勢有宜乘者焉然而曠日彌久是無他奸邪猜防甚密肘腋之

アリ豈ニ畏服セサル可ケンヤ凡ソ如是ノ場合ニ於テ筆ヲ探レハ多少激烈ノ語氣アリテ悲憤ノ言詞自カラ筆端ニ溢ルヽモノナリ餘程ニ冷血氷腸デナケレハ此樣ニハ澄シ切ラレヌヿ實驗ニテ明ナリ伯ノ慎密ニシテ一言一句ヲ苟モセサルノ性質アル上ニ胸中餘地アリテコソ此日記ノ文ハ此通リニ出來タルナレ但シ其歌ハ其

禍難遽除也其間義人志士周旋於輦下糾合回復之議其苦心可想矣如此日記成其際者豈雕鏤風月之比哉聊作蕪詩以瀆聽

忍看雲霧掩宮墻撕擊何時揚日光讀至君家葉櫻記有懷備後第三郎

元弘之事末路不善楠公以下呑恨死矣今則不然曩周旋糾合者概皆協素謀矣可喜也有詩暫託歌詩敘意裏

文ヨリハ一層ソノ鋒ヲ露ハシ其詩ニ至リテハ更ニ一層ノ露鋒ナリ是レ心ニ深ク慎ミ貯ル所モ詩歌ニハ自カラ出ルモノトハ云ヘ氏其實ハ君ノ長短ハソノ詩文ノ間ニ見ルヿトモ評スヘキ歟故ニ余ハ此葉櫻日記ヲ讀テ評シテ云ク和歌ハ詩ニ勝リ文ハマタ和歌ニ勝ル文ヲ以テ第一トスヘ

皇威未震憾何窮豈圖今日回天力悉在潛行密畫中

嗚呼逆境易順境難先哲有明言焉鑑昔之元弘而戒今之明治前途可不猛省哉書以質

明治二年四月十八日

副啟治例櫓鼓鼕〻今日之選正木野名島石荒紫灘豐香山之相角逐蓋壯觀矣大兄早枉顧焉

又啟踐前日之約錫造湯罐呈坐下勿叱却幸甚他待面既

レト併シ此評ハ文ヲ書クモノデ無ケレハ理會シ得難カルヘシ

癸巳三月十三日

福地源一郎評

素狂大兄研北

辱交　國重德拜手

明治廿五年十一月廿五日印刷并出版

非賣品

東京市麹町區内幸町一丁目六番地

發行者　兒玉少介

同市四谷區四谷傳馬町二丁目十九番地

印刷者　大澤鐵三郎